

**関西支部・関西支部 LMAG 共催**  
**第 94 回関西支部技術講演会 / 第 9 回 LMAG 現地技術講演会記録**  
**2016/10/12**

**講演会の概要**

[http://www.ieee-jp.org/section/kansai/activity/meeting\\_094.html](http://www.ieee-jp.org/section/kansai/activity/meeting_094.html) を参照。

**日時**

2016 年 10 月 12 日(水) 14:00-17:00

**場所**

奈良県立橿原考古学研究所、考古学研究所附属博物館

〒634-0065 奈良県橿原市畝傍町 1 番地

Tel : 0744-24-1101 Fax : 0744-24-6747

<http://www.kashikoken.jp/museum/access/access.html>

**参加者**

15 名 (うち IEEE 会員・LMAG 8 名(事務局含む) / LMAG 以外 3 名、非会員 4 名)

**講演者**

奥山誠義 (オクヤマ マサヨシ) 氏

奈良県立橿原考古学研究所企画部資料課指導研究員

**講演概要**

考古学の意味するところの説明があった。発掘作業は工事がきっかけであり、目的は遺構、遺物を今後長期保存することにあることにある。現在の技術で全てを分析し復元することが主目的ではなく、将来の技術に委ねることも視野にあることが説明された。戦後の早い時期から作業が始まり、膨大なデータが蓄積されている。発掘した繊維状物質に IR 分析を行い、植物性繊維か動物性繊維かの判別を行ったり、発掘物に X 線計測で内部の構造を探ったりが行われている。ごく一部の発掘物には 3 次元計測がなされ、遠方の発掘物との照合がなされ、年号が判明した事例も紹介された。

質疑では、邪馬台国の所在地に関する質問も出たが、多くは、データの蓄積と活用に関するものであった。画像処理で類似の鏡を検索するにも、埋蔵中の汚れ・割れ・欠け・歪みが個々に異なるので難しいとのことである。残念ながら、多くのデータはデジタル化されておらず、データ形式の標準化もなく他の研究組織とのデータ活用は今後の課題であるとの状況であるとの回答であった。

## 施設見学と感想

地下一階の膨大な数の資料倉庫、二階の膨大な図書類、写真類、を見学した。フィルム写真からデジタルカメラに、スライドから FD,CD、DVD へと記録媒体が変化しているが、結局のところ長期保存に向くのは紙媒体でしかない。過去の膨大な資料を今から追っかけてデジタル化するのは、費用的にも膨大すぎる、とのことを聞き、参加者一同はなんとかしなければと思いながら、蓄積物の膨大さの前にすぐには妙案が浮かばなかった。

参加者からは、“興味深かったのは今はやりの「ビッグデータが考古学研究では全く役に立たなかった」と話とデータ保存に関する「デジタルデータ」の危うさでした。単なる「ビッグなデータの解析」となっている気がします。そのため土器ひとつの復元も研究員の「直感」のレベルに全く至ってなく、最新の 3 次元データ解析も単なる確認にしか用いられていないようです。

もう一つの大きな問題が「記録の保存」で、サーバは 10 年、多くの記録媒体もその再生装置が数十年後にはなくなり、いまだにフィルムや紙などのアナログデータ保存が主流となっています。考古学データは 1000 年後にも残るものでなければならず IEEE も長期保存できるデータについて真剣に研究して欲しいという要望でした。磁気記録も「ロゼッタストーン」のように 1000 年先も読み出し可能な方法を考える必要がありそうです。” という感想も寄せられた。

## 写真

	
発掘物の保管記録作業	膨大な記録資料類
	
檀原考古学研究所前での集合写真	考古学研究所附属博物館前での集合写真

以上